

奈良県下仏画調査報告(1)

年報の創刊を機に、私が研究所に赴任して以来約五年間、奈良県下を調査して廻り、その際に偶目するを得、或は又従来から知られ乍らも公表の機会に恵まれなかつた仏画類のうち、特に優秀なものを寺社別に整理して、大方の便に供したいと思う。但し、ここに通称南都七大寺なる奈良市周辺の諸大寺については、その一部は既に調査済みで、公表したものもあるが、更に将来南都諸大寺の絵画に関する綜合目録をも意図しているので、紙面の都合もあつてこれを割愛した。又従来

から国家の指定を受けているものも省略に附した。

以下諸寺社の仏画を列記するに当つて、時代の余りに降つたものはこれを除き、主として室町時代までの秀作のみを紹介するに留めた。尚上段に○印を附したものはとりわけ優れたものと認められるものである。又紙数の関係上十分説き尽し難い優品については、あらためて詳述する機会を持ちたい。

一 庚 申 堂

生駒郡片桐町

一国一字庚申堂と称し、寺伝では明暦年中(1655頃)に建立を見、以後民間に特殊な信仰を得た。従つて同寺の主なものは何れも後世の寄進になる。先づ庚申信仰の本尊である青面金剛に注目したい。

○青面金剛像 一幅 (14世紀)

絹本着色 掛幅 (縦) 24.5cm (横) 13.7cm

小画面中央に二鬼上に立つ三目四臂の青面金剛像を配し、左右に二童子、下方に四鬼神を描く。細勁線を駆使し極めて細密の彩色を施す手法は、古い装飾経などに近い。画面の周囲には紗に裏箔を施した古い表装部分を留め興味深い。四天王寺庚申堂の伝来と伝う、聊か破損と変色が著しい。

第1図 青面金剛像

青面金剛像 一幅 (第1図) (15世紀)

絹本着色 掛幅 (縦) 93.0cm (横) 33.0cm

前者に比して画面ははるかに大きい、構図など前者と殆ど異らない。ただ彩色手法共大まかで、南都系仏画の風趣を示す。時代は前者よりやや降る。東大寺戒壇院什物と伝う。

大般若十六善神図 一幅 (14世紀)

絹本着色 掛幅 一副半 (絹幅89.4cm) (縦) 111.5cm

第2図 聖衆来迎図

(横) 56.7cm

破損と共に後補がかなりひどく、上下左右に切りつづめがある。通途のものに比して古様且つ異形を示し、彩色には金泥切金などを用いない。もと鏡作神宮寺(奈良県磯城郡都村にあつたと伝えられる)の什物と伝う。

仏涅槃図 一幅 (15世紀)

絹本着色 掛幅 三副一鋪 (絹幅39.3cm) (縦) 144.0cm
(横) 116.3cm

疎絹を用いる。南都系絵仏師の作。

この他、弘法大師像、天弓愛染像、高野四社明神像の三幅対、天川弁才天秘曼荼羅一幅、等見るべきものあり、又襖絵として望月玉蟾の神仙図が注目値する。

一一 松 尾 寺 大和郡山市矢田町

初午で高名の松尾寺もその史実には乏しく、中世以後修験的な道場として推移したらしい事が想像されるに過ぎない。絵画には比較的密教系のものが多い。尚釈迦八大菩薩像のみは重要文化財の指定を受けている。

○聖衆来迎図 一幅 (第2図) (13世紀)

絹本着色 掛幅 三副一鋪 (両側幅狭し) (縦) 101.0cm
(横) 81.4cm

極めて古様の来迎図と見られ、中尊をとりまく七尊は二比丘形を混え、その配列には曼荼羅的なものを感じ、京都安楽寿院本(重要文化

財)に酷似する。別に15世紀頃の釈迦・弥陀發遣來迎図一幅——(豎)120.7cm (横)65.5cm が注目される。

○仏眼曼荼羅 一幅 (14世紀)

絹本着色 掛幅 (豎)71cm (横)58cm

やや異形の仏眼曼荼羅。図像的に注目される。色彩が鮮明で美しい。これよりやや降る時代の尊勝曼荼羅——(豎)105cm (横)79.7cm——尊勝、愛染、不動三体のみの曼荼羅、ほぼ同本を河内金剛寺に蔵する(重要文化財)。

弥勒菩薩像 一幅 (15世紀)

絹本着色 掛幅 (豎)95.5cm (横)43.5cm

定印の上に五輪塔を保つ、五智宝冠を着する菩薩形。台座その他の彩色は華美で、南都系仏画に属する。

如意輪観音像 一幅 (15世紀)

絹本着色 掛幅 一副半(絹幅35.7cm) (豎)95.5cm

(横)51.5cm

六臂の如意輪観音は岩座上にあり、その右辺に瀑布と奔流と二童子を、左下方に竜を描く異色ある作品。題して石山如意輪観音という。

大威徳明王像 一幅 (15世紀)

絹本着色 掛幅 一副半(絹幅45cm) (豎)117.2cm

(横)65.8cm

時代は降るが唐招提寺本(重要文化財)と同形の像。

○愛染明王像 一幅 (14世紀)

絹本着色 掛幅 (豎)82cm (横)41cm

通途の愛染明王像、朱肉身、朱円光、宝瓶上に坐す。作風優秀。尚同寺には15世紀頃の天弓愛染明王像のほか、同形の愛染明王像二種がある。

愛染明王像 一幅 (15世紀)

絹本着色 掛幅 一副半(絹幅39.3cm) (豎)110cm

(横)57.5cm

衣文に盛上げ彩色多用、下方に石畳あり、左右に夫々來迎形の十一面観音立像と八臂弁才天立像を配する異形のもの。

この他やや見るべきものとして、紅顔梨色阿弥陀如來像、來迎形十一面観音菩薩像各一幅。不動明王二童子像三種三幅等があり、山田道安筆と伝えられる市守長者像一幅もかなり高名である。

三宝 幢 寺 生駒郡生駒町小平尾

生駒郷の古刹で、室町初期の本堂には、地藏十王図、普賢十羅刹女図の壁画が描かれている。

第3図 釈迦三尊像

阿弥陀三尊像 一幅 (14世紀)

絹本着色 掛幅 (縦) 115cm (横) 55cm

切金の細緻な好みは、余り古く溯り得ない。三尊とも立像で、来迎形を示すが、傷みがひどい。

釈迦三尊像 一幅 (第3図) (15世紀)

絹本着色 掛幅 (縦) 80cm (横) 45cm

前者と異り切金を用いず、多彩を極める趣味は南都系仏画の典型である。脇侍は夫々、獅子と象に乗る。時代はやや降るであらう。

四 長 福 寺 生駒郡生駒町俵口

寺史は詳でない。鎌倉後期の本堂内陣には柱に両界の諸尊、長押や小壁に飛天や千体仏を描き甚だ興味深い。

第4図 不動明王二童子像

○文殊諸尊来迎図 一幅 (15世紀)

板絵著色 掛幅 (縦) 171.8cm (横) 87.8cm

文殊菩薩は梵篋と剣を持つて獅子に跨り、八大童子と見られる諸脇侍を従えて雲に乗り来迎する如くに見える。変顔色と剝落のため原容は著しく失われているが、来迎形文殊諸尊像は珍しい。

五 大 福 寺 北葛城郡広陵町箸尾

その昔東西両寺を中心に多くの堂舎を有したこの寺も今は全く疲弊している。しかしそこに遺存する仏画には見るべきものが少なくなく、往時を偲ぶに足る。

両界曼荼羅 双幅 (15世紀)

絹本着色 掛幅 (縦) 156cm (横) 120cm

もと小田原天徳院(高野山)の什宝たりしもの、後年同寺に流入したと見られる。保存のよい彩色の美しいものである。

仏涅槃図 一幅 (14世紀)

絹本着色 掛幅 三副一鋪 (縦) 124.5cm (横) 96cm

釈迦三尊十六善神図 一幅 (14世紀)

絹本着色 掛幅 三副一鋪 (縦) 145cm (横) 72cm

共に細かい絹地に美しい彩色と細い切金を施す、制作もほぼ同じ頃と思われる。所謂南都系絵師の作、共に正徳六年(1716)同寺東寺西方院に於て修補を見ている。

四臂不動明王二童子像 一幅 (第4図) (15世紀)

絹本着色 掛幅 三副一鋪(両側狭し) (縦) 124cm (横) 66cm

明王は立像、右手は蓮花と劍 左手は三鈷戟と索、水波上岩座に立つ、盛上げ彩色の傾向を帯び、切金を用いず金泥を主とす。古様の図像によるものであらう。

○弘法大師像 一幅

(14世紀)

絹本着色 掛幅 三副一鋪 (縦) 101.5cm (横) 95cm
箱書によればもと永久寺学侶方のもの、彩色は淡白にして筆格はすぐれている。

○益信・聖宝両僧正像 双幅

(15世紀)

絹本着色 掛幅 (縦) 54.5cm (横) 32.2cm
粗い絹地にも拘らず細い筆使いは、性格描写に富み、この種画像としては逸品。上部には賛文がある。

尚大福寺にはこの他に、天文二年(1543)の年記を有する十二天像十二幅、天文一五年(1546)の春日鹿曼荼羅一幅、天文一八年(1549)の真言八祖像八幅、文亀三年(1572)の天神像一幅等あり、何れも時代に比して古様で筆格高く且つ保存がよい。これらには共通して南都系仏画の傾向が濃厚である。

六 室 生 寺

宇陀郡室生村

同寺の絵画と云えば、金堂後壁の帝釈天曼荼羅と金堂諸仏の彩色光背によつて著名であるが、掛幅画としては次の如き什宝を蔵する。

両界曼荼羅 双幅

(14世紀)

絹本着色 掛幅 (縦) 209cm (横) 188cm
破損少く、彩色・切金等に見るべきものがあるが、尊像の配置には

やや崩れが見られる。

釈迦三尊十六善神図 一幅

(15世紀)

絹本着色 掛幅 三副一鋪(両側幅狭) (縦) 123.5cm (横) 79.7cm

十六善神に阿難・法涌・玄奘・深沙大將を伴う、上方に靈鷲山あり、下段に水波あり、波文翻転著し、文亀二年(1502)の修理銘を有し、慶応三年郡山高島家からの寄進となす。

○善如竜王図 一幅

(14世紀)

絹本着色 掛幅 (縦) 91.5cm (横) 38.5cm

古来室生寺の祕宝、細絹に極めて細麗の筆、緑色の顔には宝冠を頂き、朱衣の上には群青緑青交りの雲文、輪宝文を散らす。全体黒ずんで破絹もかなり及ぶ。桂昌院の修補にかかる蒔絵箱に納む。尚他に竜王像二三幅あり。

○真言八祖図 八幅

(14世紀)

絹本着色 掛幅 三副一鋪(絹幅43.7cm) (縦) 大約167cm (横) 142.5cm

通途の八祖画像、但し筆格高く古勁の線と淡彩の故に、漂渺とした大きな感ぜしめる佳品、明暦(1655頃)、享保、明治初と修理を重ね。保存良好、一部賛あり。

○理源大師像 一幅

(14世紀)

絹本着色 掛幅 三幅一鋪 (縦) 179cm (横) 118.8cm
色彩は淡白で淡緑以外は殆んど目立たない。破損ひどく頭部の欠損著しいのが惜まれる。或は前記八祖像と同時の作か。理源大師に誤な

しとすれば古像に属す。上部に賛あり。

尚室生寺には以上の他に、著名な南蛮風俗図屏風六曲一双、及びやや見るべきものとして仏涅槃図、弥勒菩薩像、聖徳太子像各一幅、室生寺特有のものとして宝珠曼荼羅、土心水師像各一幅等がある。永正九年(1512)の年記ある宝篋印舍利塔には不動愛染四天王の屏絵がある。

七大蔵寺

宇陀郡大宇陀町栗野

奥竜門の名刹である大蔵寺は、往時芳野から伊賀方面へぬける道筋にあつたものと考えられるが、現在は訪れる人も稀である。

両界曼荼羅 双幅

応永三年(1396)

絹本着色 掛幅 (縦) 149.8cm (横) 129cm

細密な彩色手法を駆使し、すぐれたものである。箱書に「応永三子年南呂(八月)之天」とあるのを制作年次と考えてよいであろう。

第5図 十二神将像

○聖衆来迎図 一幅 (14世紀)

絹本着色 掛幅 一副一鋪(絹幅42cm) (縦) 122.5cm

(横) 84.0cm

中央向つて左上より右下に阿弥陀如来及び廿六体の菩薩衆が来迎する。上限に極楽浄土宮、下段に娑婆世界の光景を往生者の邸と共に描き、右辺には雲中無数の立像型小化仏を配する。細緻な切金文の趣向は余り湧り得ない。

釈迦三尊十六善神 一幅 (15世紀)

絹本着色 掛幅 (縦) 107.5cm (横) 62.7cm

通途の作品。貞享三年(1686)の修理銘を有する。尚同時修補の十

六羅漢十六幅あり。

真言八祖図 八幅 (15世紀)

絹本着色 掛幅 (縦) 72.5cm (横) 37.8cm

室町期特有の粗絹なれど古様を保つ佳品。よき粉本による転写本、上部に賛あり。破損かなり著しい。他にやや時代の降る弘法大師像一幅あり。

○十二神将像 十二面 (第5図) (13世紀)

板絵著色 額装 (縦) 約90cm (横) 約60cm

非常に個性的な特異な像容は、古い図像によつた事を示し、興福寺蔵板彫十二神将を想起せしめる。もとは一連の板壁画であつたものを一体つつ切断し額装にしたらしく、切断面は区々で新しい板を継いで長方形に作上げている。本堂本尊薬師如来(12世紀頃)の外護の役を勤めたものであろう。更に細説を期す。

尚同寺にはこの他に、斯界に著名な聖徳太子絵伝二幅を蔵するが、私はこれを調査していない。他に延徳二年（1490）施入の高野大師行状絵伝十巻がありほぼその頃の作であろう。十二天立像十二幅、仏涅槃図一幅、等も室町期を降らないものである。

この他に調査を行った所として吉野郡下市町内の願行寺、滝上寺等があるが、それらの詳細は近頃上梓を見た大和下市史に説明を試みた。又生駒郡生駒神社の生駒曼荼羅については、国華782号の一部に附説したので共に省略に附した。

図版解説

薬師如来坐像

京都 六波羅蜜寺

木造添箱 像高五尺三寸五分

与願施無畏印の通仏相に薬壺を持った薬師如来で、いわゆる半丈六の坐像である。見るからに堂々とした風姿をもつたもので、彫りの調子も力強い。この様式や手法などは、藤原前期の正暦四年（993）の納入文書をもつ滋賀県善水寺の薬師如来像によく似たもので、あるいはそれよりも多少古いようなところも見うけられる。それだけになかなかしつかりとした好い像である。こんなものが未だあまり人に知られずに残っているのであるから、六波羅蜜寺はやはり伝統の古い名刹である。

（小林 剛）